

1937.12

近現代史研究家

阿羅健一

「南京事件」 日本人48人の証言



小学館文庫

あ27

1

阿羅健一

「南京事件」日本人48人の証言

小学館文庫



9784094025460

ISBN4-09-402546-4

C0193 ¥600E



1920193006001

定価：本体600円＋税

小学館

一九三七年十二月、南京で何が起こったのか？ 三十万人あるいは数千人といわれる「南京虐殺」の現場は、一体どうなっていたのか？

過去、「南京事件」の証拠、証言とされたものには多くの虚偽が含まれ、大新聞にさえ虚報が載り、真相を一層わからにくくしたものしてきた。

本書は、当時南京にいた軍人・記者・写真家等、日本人生存者に直接インタビューした証言集である。今は亡き人も多数含む貴重な証言集から浮かび上がってくる「歴史的事件」の真相とは…？

昭和六二年刊行時、各界に衝撃を与えた「第一級資料」を復刊。解説・櫻井よしこ

推薦のことば

ジャーナリスト 櫻井よしこ

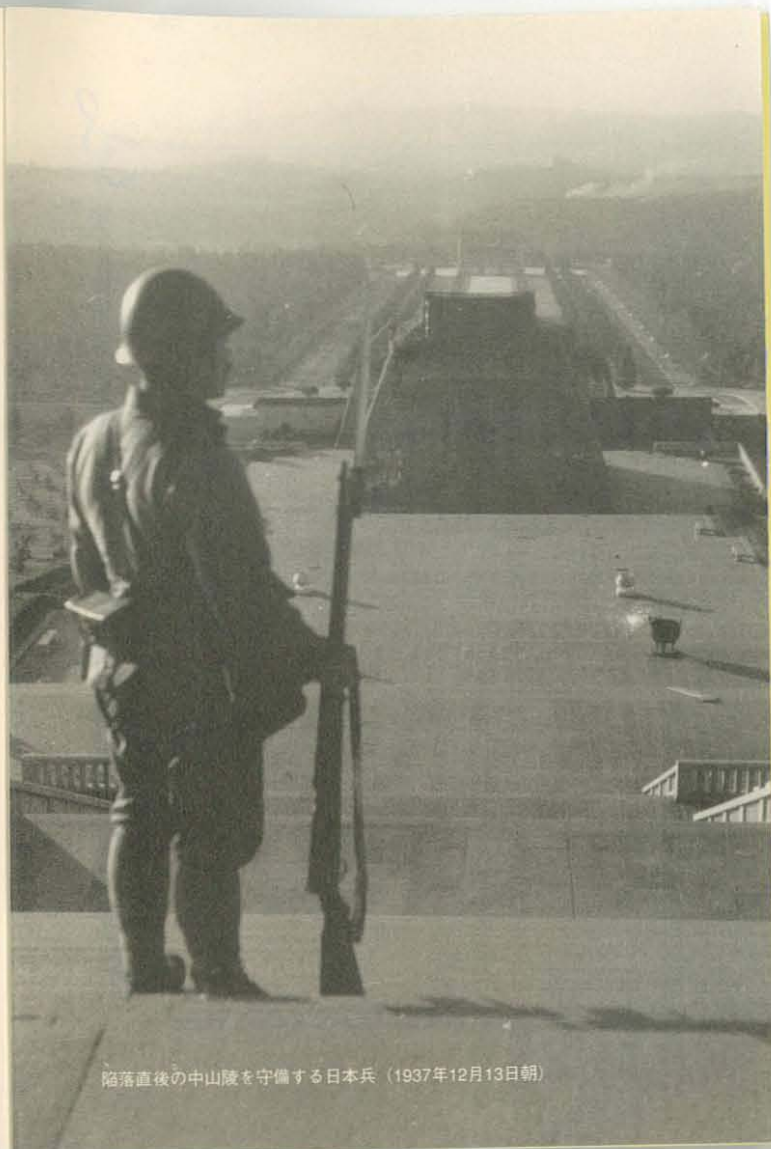
本書は、一九三七年当時の南京にいた軍人、ジャーナリスト、外交官など関係者の体験談を集めた第一級の資料である。いわゆる「南京事件」は、その呼び方すら今だ定まらなほど議論の分かれる問題だが、まずは、そのとき現地にいた人々の話を実際に聞くのが筋である。従って、本書をまとめた阿羅健一氏の手法は、ジャーナリズムという観点からみて、極めて基本に忠実な誠実なアプローチだといえる。

一体、日本人は南京で何をしたのか、しなかったのか、そして何を見たのか。虐殺と言われるようなことは本当にあったのか。

それらの結論は、本書を読めば自ずと見えてくる。

ここに、もう一つの資料がある。北村稔氏の『「南京事件」の探求』（文春新書）である。この本は、東京裁判で「南京事件」が断罪された際に提出された様々な資料をひとつひとつ見直し、冷静に検証したものだ。その中にこんな話がある。

当時、南京で中国人の遺体処理にあたっていたのは、現地の紅卍字会こうまんじという組織と、崇善堂すぜんどうという慈善団体だったとされている。紅卍字会は四万三千余の遺体を埋めたといい、崇善



陥落直後の中山陵を守護する日本兵（1937年12月13日朝）

堂は十一万余を埋めたという。それらの合計が、日本兵による何十万人という虐殺の数の大きな根拠となった。しかし、崇善堂についてはその実在性が疑われた。その疑いに対して中国側が出した証拠は、崇善堂は車を一台所有しており、彼らがその車の部品の補給を要請したという書類だけだった。その資料から浮かびあがるのは、崇善堂という組織があった一台の車しか持たずに、一九三八年四月のひと月間というごく短期間で十万余もの数の死体を運び、全て埋葬したという、到底信じ難い事実である。

崇善堂の主張の信憑性は、中国側が提示した証拠によって逆に疑わしいものになったという。

一方、本書にも崇善堂は登場する。当時、上海派遣軍参謀で、かつ南京特務機関長だった大西一大尉は、阿羅氏の質問に対し、紅卍字会については、知っている、遺体の埋葬をよくやっていた、と述べ、崇善堂についてはこう述べている。

「当時、全然名前を聞いたことはなかったし、知らなかった。それが戦後、東京裁判で正しい活躍をしたと言っている。当時は全然知らない」

紅卍字会を遥かに凌ぐ埋葬活動をしたという組織を、全く知らないと言うのである。

上海派遣軍の大西氏は一九三七年十二月十三日に南京に入り、三八年二月からは特務機関長として一年間、南京にとどまった。南京特務機関長は中国市民への日本側窓口にあたる。大西氏は南京滞在の時期からも、その職責面からも、南京事件と南京市民の実態を最もよく知り得る立場にあった。その大西氏が崇善堂について、全く知らないというのだ。

もちろん、大西氏は崇善堂を貶めようとしている訳ではない。自分が当時実際に見たこと、知り得たことを淡々と述べているに過ぎない。しかし、こうした当事者の客観的な証言が、学者が調査した結果と見事に一致する。

真実とは、こうしたところにあるのではないだろうか。

過去、東京裁判、また朝日新聞や本多勝一氏に代表される「南京大虐殺」キャンペーンなどを経て、「南京イコール大虐殺」のイメージが定着し、日本人自身が、我々はとにかく悪いことをした、残虐なことをしたのだという自縛意識に陥ってしまった。

しかし、私たちの親や祖父たちは、本当にそんな残虐なことをしたのだろうか。何十万人の人々を虫けらのように殺すような人たちだったのだろうか。私たちは、自分たちを信ずるに足らないような民族なのだろうか。

歴史は、人間のつながり、そして家族のつながりでもある。家族としての信頼感や民族としての愛情を全面的に否定するのではなく、私たちは歴史を冷静に正しくみつめ直すべきである。

もちろん、間違いはあっただろう。無謀な戦争に対する責任も、犯した過ちを詫びる心も大切である。しかし、戦後になってつくられた情報によって、観念論のみで歴史を捉え過ぎてはいないか。日本はとにかく悪いことをしたのだと教科書で教えられ、ただひたすらそう思いこんではいないか。

反省と同時に、自分の頭で考え、実際に何があったのか、物事の真実を見極めることを

忘れてはならない。また、過去に国のために戦い亡くなった人々、戦犯として裁かれた人々の犠牲に対しても、彼らの犠牲に、日本人であればこそ、想いを致し、悼み、感謝する心を忘れてはならない。

歴史には、「資料から見る歴史」、「報道から見る歴史」など様々な側面があるが、現代日本で最も省みられないものが、当事者による「語り継ぎの歴史」である。

ヨーロッパでもアジアでも、また核家族化が激しいアメリカでさえ、家族や先祖の物語がきちんと語り継がれている。しかし、日本はそれがほとんどなくなってしまった稀有な国だ。自分たちの前の世代、そのまたさらに前の世代が一体どんな暮らしをしていたのか、どんなことを思い、考えていたのかの記憶が断絶されてしまっている。さらに、その傾向は年々強くなっている。多くの日本人が、教科書が教える表面的な歴史しか知らず、歴史が自分の体の一部であるという自覚がないのは、そのためだろう。

本書にはまさに、その「歴史の語り継ぎ」を補う力がある。父親や母親、また祖父母や曾祖父母に代わって歴史を語り継ぐ重要な記録である。

既に半世紀以上たつて、残念ながら戦争を体験した人々の多くが亡くなっている。阿羅氏は十数年前、本書のために多くの方々を訪ねて話を聞いているが、それからさらに時が過ぎた現在、生存されている方はほんのわずかであるという。

二十一世紀に入って、世界ではテロ行為や戦争が勃発し、私たちは改めて国とは何か、民族とは何か、宗教とは何かという課題を突きつけられることになった。

折しも国内では、教科書問題や靖国神社問題など歴史認識の見直しが図られるような出来事が続いた。私たちの国、そして国際社会を築いていく基本的な価値観をどこに据えるべきか、またその価値観をどう守るべきかという岐路に立たされているのだ。

本書を読んで、物事の真実を自分の頭で判断してみてほしい。世界が揺れている時だからこそ、自分たちの国や歴史を冷静に見直すことが求められているのである。

文庫化にあたって

昭和十二年七月七日、北京郊外の蘆溝橋近辺で夜間演習を行っていた日本軍に突然弾が飛んできた。中国軍によるものだと考えた日本軍はただちに中国軍と話し合いを行った。

話し合いが行われたけれど、その一方で小競り合いは続き、そうしているうち、争いはしだいに大きくなり、二十七日には、三個師団が北京方面に派遣されることになった。

そのころの中国で、最も多くの日本人がいたのは上海である。北京の争いが続くうち、その上海が騒がしくなってきた。上海には日本の工場があり、それら工場と日本人を海軍陸戦隊が守っていた。日がたつにつれ、上海が險悪になってきた。

八月九日、海軍陸戦隊の大山勇夫中尉が射殺された。十三日には、海軍陸戦隊と中国軍が衝突した。中国の兵力は海軍陸戦隊の何倍もあり、在留日本人の生命が危険になってくる。すでに七月二十九日、北京郊外の通州で、二百二十三人の在留邦人が虐殺されるといふ、いわゆる通州事件が起こっていた。

そのため、上海派遣軍が編成されて上海に向うことになった。司令官には、中国通として知られていた松井石根大將が親補された。

中国軍は、数年もかけて陣地をつくっており、ドイツ式の装備をし、ドイツ軍から訓練を受けた精強な部隊が待ち受けていた。上海派遣軍は八月二十三日から上陸を始めたが、激しい戦いとなった。攻めるのは日本軍だったが、一月たっても、二月たっても、上海を制圧することはできなかった。日ごとに日本軍の戦死者が増えていった。

中国軍の背後を突くため、十一月五日、新しく編成された第十軍が杭州湾に上陸した。背後から攻められた中国軍は崩れ、潰走を始めた。

上陸したての第十軍は、この際、潰走する敵を追って首都南京まで攻めのぼり、そこで和平を考えるべきだという意見を持っていた。それを意見具申するとともに、潰走する敵を追撃しはじめた。やがて、上海を制圧した上海派遣軍からも同様な意見が出された。

十二月一日、南京攻略の命令が参謀本部からくだった。上海派遣軍と第十軍を統一指揮するため中支那方面軍がもうけられ、松井大將が司令官に任命された。南京を目指す日本軍は七、八万人に達した。

当初、南京攻略は一月半ばと予想されていたけれど、日本軍の追撃は速く、十二月十日には靖江の第三十六連隊が光華門に突入、十二月十二日の昼には大分の第四十七連隊がはしごをかけて城壁にのぼりはじめた。

この日の夜、中国軍には撤退命令が出された。

しかし、ほとんどが正面から突破することを命ぜられたため、多くの将兵は軍服を脱ぎ捨て、城内にある難民区（安全区）に逃げこんだ。

十二月十三日、城内に進んだ日本軍は中国軍を掃討していった。掃討戦は十六日まで続

き、十七日には松井大将を先頭として入城式が行われ、翌日は慰霊祭が行われた。

慰霊祭が終わると、第十軍は杭州湾に向い、南京には上海派遣軍が残った。松井大将も十二月二十二日には上海に戻った。以後、上海派遣軍の中の第十六師団が一月下旬まで南京を警備する。

上海の戦いから南京攻略戦が終わるまでの犠牲者については、日本軍の最高司令官であった松井大将の日記に、日本軍の戦病死者の総数は二万四千に達したとあり、一方、国民党軍軍政部長である何応欽上将の軍事報告には、この間の中国軍の戦死者は三万三千とある。

日本軍の戦死者のほとんどは上海戦によるもので、予想もしない膨大な数字となった。このときから八年間、日本軍は大陸で戦うことになるけれど、劈頭に最大の犠牲者を出すこととなった。

昭和十二年十二月、南京が陥落したとき、そこで何が起こったのか。

まれにみる残酷な事件がひき起こされたとき日本人が知ったのは、それから九年もして、東京裁判が開かれたときであった。

日本軍が南京に入った十二月十三日から一月下旬まで、暴行、略奪、強姦、放火が南京で繰り返されたと東京裁判で判決された。虐殺数は十万人とも二十万人とも言われた。それらを止めるため適切な手段を講じなかったとして最高司令官の松井石根大将が絞首刑になった。また、その当時外務大臣だった広田弘毅も同じ責任を問われ、ほかの理由とあわせて絞首刑となった。

しかし、そう知らされたとき、日本は占領下に置かれていて、さらにだれもが食べることに精一杯という時であった。

何十万人という大虐殺が本当におこったのか。あるいは、どの戦場にもあるような光景があっただけなのか、本当はどうだったのか。そのとき南京にいた同胞にたずねられるものなら、ぜひともたずねたい、そこに本当の答えがある。日本人ならそう思い至るのではなからうか。

そのとき、どのような日本人が南京にいたかといえば、いうまでもなく日本軍である。日本軍といっても、南京のあちこちらを見て歩き、南京の様子を知っていたのは、兵隊や下士官ではなく、上級将校であろう。

軍隊だけが南京にいたのではない。南京陥落を報道するため二百人を超す記者たちが南京に入った。占領したあとの行政や治安のため、外交官も入った。彼らも軍の上級将校と同じように、南京全体のことを知っていただろう。

そういった人たちが語る南京なら信用できるのではないのか。

そう思ってあたってみると、六十七人が存命中で連絡がとれた。昭和五十九年から六十年にかけてのことである。

いっても、そのときでも昭和十二年からはほぼ半世紀がたっており、その六十七人のう

ち三十五人から話が聞け、残りの三十二人のうち十一人からは手紙で返事をもらったけれど、残りからは、主に病氣という理由で、話を聞くことはできなかった。

さらに、話の聞いた人たちにしても、全員がくまなく南京を見て、南京で何が起こっていたか知っていたわけではなかった。ある場所のことは詳しいけれど、全く行ったことのない場所もある。

しかし、彼らの証言をつなぎあわせれば、ジグソーパズルを組み立てるように、南京の様子が浮かび上がってくる。

その三十五人の中には一度だけ会った人もいれば、十回ほど会った人もいる。ほとんどの方には三回会っている。話を聞くのに二度、まとめた原稿に誤りがないかどうか見てもらうのに一度である。

原稿は正確を期すために発表前に確認してもらったが、発言の「」の部分はもちろん、地の文も発言のニュアンスをかえるといけないのでチェックしてもらった。

半分ほどの方が間違いはないということであったが、半分の方からは注文があった。このうち半分は字句の修正、一部の聞き誤りなどの訂正であったが、残り半分近くは全面的に書き直しを要望された。そのため指示に従って書き直した。

こうして、一冊の本にまとめたものが、昭和六十二年に『聞き書 南京事件』として図書出版社から発行された。

それから十五年がたち、絶版となっていた『聞き書 南京事件』が、題名を改め、櫻井

よしこ氏による文章もいただき、小学館文庫から発売されることになった。

昭和六十二年に発行されたものは、四六判で三百頁もあった。そのうえ今回は、公表をしばらくひかえてくれるようにと要請のあった南正義氏の証言と、発行の直後に話の聞いた諫山春樹氏、大槻章氏の証言も掲載したい。

しかし、これらすべてを文庫に収めると、だいぶ厚いものになる。そのため、証言者の経歴など、南京と直接関係のない部分は省くことにした。

どうやら文庫として収まることになった。四十八人の証言を収めることができた。

ここに集まったものは、ほとんどが明治生れの日本人の証言である。われわれ日本人は、われわれの父や祖父たちの述べていることから、昭和十二年十二月に南京で何が起こったのか、何が起こらなかったのか、判断できるであろう。彼らの言葉のなかに、真実があるのではなかろうか。

推薦のことは 櫻井よしこ 3
文庫化にあたって 8

【第一章】

ジャーナリストの見た南京

一、朝日新聞

大阪朝日新聞・山本治上海支局員の証言 20
東京朝日新聞・足立和雄記者の証言 26
東京朝日新聞・橋本登美三郎上海支局次長の証言 34

二、毎日新聞

東京日々新聞・金沢喜雄カメラマンの証言 40
東京日々新聞・佐藤振寿カメラマンの証言 45
大阪毎日新聞・五島広作記者の証言 59
東京日々新聞・鈴木二郎記者の証言 63

三、読売新聞

報知新聞・二村次郎カメラマンの証言 75
報知新聞・田口利介記者の証言 83

四、同盟通信

読売新聞・樋口哲雄撮影技師の証言 90
読売新聞・森博カメラマンの証言 95
同盟通信・新井正義記者の証言 104
同盟通信映画部・浅井達三カメラマンの証言 108
同盟通信・細波孝無電技師の証言 116

五、その他

新愛知新聞・南正義記者の証言 126
福岡日々新聞・三苦幹之介記者の証言 131
都新聞・小池秋羊記者の証言 142
福島民報・箭内正五郎記者の証言 151

【第二章】

軍人の見た南京

一、陸軍

第十軍参謀・吉永朴少佐の証言 162
上海派遣軍特務部員・岡田西次少佐の証言 169

【第三章】 画家・写真家の見た南京

海軍従軍絵画通信員・住谷磐根氏の証言

272

271

二、海軍

上海派遣軍参謀・大西一大尉の証言

177

松井軍司令官付・岡田尚氏の証言

192

第十軍参謀・谷田勇大佐の証言

205

第十軍参謀・金子倫介大尉の証言

218

企画院事務官・岡田芳政氏の証言

222

参謀本部庶務課長・諫山春樹大佐の証言

228

陸軍省軍務局軍事課編制班・大槻章少佐の証言

233

野砲兵第二十二連隊長・三国直福大佐の証言

236

砲艦勢多艦長・寺崎隆治少佐の証言

246

砲艦比良艦長・土井申二中佐の証言

253

上海海軍武官府報道担当・重村実大尉の証言

259

第二連合航空隊参謀・源田実少佐の証言

267

外務省情報部特派カメラマン・渡辺義雄氏の証言
陸軍報道班員・小柳次一氏の証言

289

279

【第四章】 外交官の見た南京

領事官補・岩井英一氏の証言

296

領事官補・粕谷孝夫氏の証言

301

補遺

306

あとがき

314

【編集部注】

本書は、一九八七年八月に刊行された「聞き書 南京事件」を文庫化したものです。本文は基本的に原本のままでありますが、文庫化にあたり、頁数の関係から一部削除しました。なお、本文中には、現在では不穏当とされる表現も登場しますが、証言内容を損なわないよう、あえて原文のママとしました。

編集 佐藤幸一

真田晴美

編集協力 水間政憲

校正 飯田憲一

本文デザイン・DTP

クリエイティブ・サノシヤパン

写真提供 佐藤振寿

295

第一章

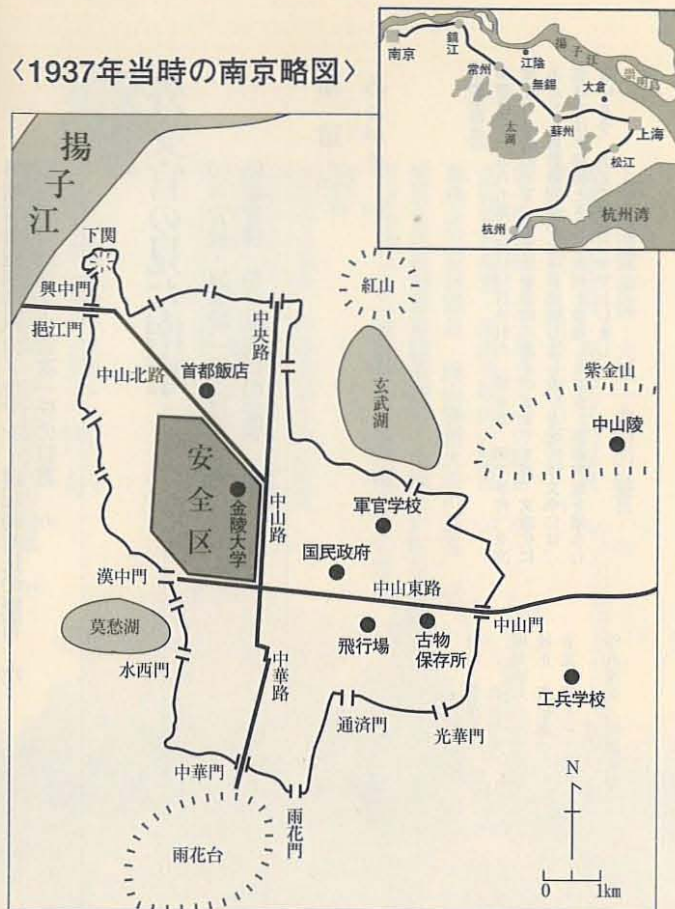
ジャーナリストの 見た南京

……事件と言うようなものはなかった
と思います。私も見ていませんし、朝
日でも話題になってません。また、あ
の市民の数と中国軍の動きでそういう
ことが起きるはずがありません。私が
上海、南京で見た死体というのは、最
初、黄浦江の船の周りにあったたくさ
んの中国兵と、上海市街戦での戦死体
です。あとは南京の城壁ですね。城壁
の死体はきれいなもので、首を斬られ
たとかいう虐殺されたものではありま
せん。(大阪朝日新聞・山本治上海支
局員の証言より)



「中国人は日本人カメラマンが行くと、積極的に子供を抱えて撮影に協力してくる。日本兵や日本人を恐れていなかった」(佐藤振寿氏、昭和12年12月15日、南京安全区にて撮影)

〈1937年当時の南京略図〉



城壁で囲まれた南京城内の面積は、現在の東京・山の手線で囲まれた地域の広さとはほぼ同じである。そのうち、安全区内の面積は約3.8平方キロメートル。